改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムにおける実務実習に向けた 大学・施設間の情報共有の実施と薬剤師の意識調査

舘 知也^{*1,2}, 野口義紘^{1,3}, 水井貴詞², 山下修司^{3,4}, 堺 千紘^{3,5}, 横山 聡^{3,5}
伊野陽子^{3,5}, 井口和弘^{3,5}, 福田聖啓², 安田昌宏², 後藤千寿², 寺町ひとみ^{*1,3,6}

岐阜薬科大学病院薬学研究室¹, 岐阜市民病院薬剤部², 岐阜薬科大学附属薬局³

岐阜薬科大学実践社会薬学研究室⁴, 岐阜薬科大学薬局薬学研究室⁵

岐阜薬科大学地域医療薬学寄附講座⁶

Implementation of Information Sharing between University and Training Facilities, and Survey on Pharmacists' Awareness of the Sharing for Pharmaceutical Practical Training with the Model Core Curriculum for Pharmacy Education –2013 version–

Tomoya Tachi^{*1,2}, Yoshihiro Noguchi^{1,3}, Takashi Mizui², Shuji Yamashita^{3,4},
Chihiro Sakai^{3,5}, Satoshi Yokoyama^{3,5}, Yoko Ino^{3,5}, Kazuhiro Iguchi^{3,5},
Masahiro Fukuta², Masahiro Yasuda², Chitoshi Goto² and Hitomi Teramachi^{*1,3,6}

Laboratory of Clinical Pharmacy, Gifu Pharmaceutical University¹,

Department of Pharmacy, Gifu Municipal Hospital²,

Gifu Pharmaceutical University Community Pharmacy, Gifu Pharmaceutical University³,

Laboratory of Pharmacy Practice and Social Science, Gifu Pharmaceutical University⁴,

Laboratory of Community Pharmacy, Gifu Pharmaceutical University⁵,

Laboratory of Community Healthcare Pharmacy, Gifu Pharmaceutical University⁶

〔 Received January 12, 2018 〕
〔 Accepted March 26, 2018 〕

The purposes of our study are to carry out a trial focused on information sharing between universities and training facilities for pharmaceutical practical training with the Model Core Curriculum for Pharmacy Education –2013 version– and to clarify pharmacists' awareness and opinion of the information sharing. We performed the trial in Gifu Municipal Hospital and Gifu Pharmaceutical University Community Pharmacy and performed a questionnaire survey for pharmacists in the facilities between December 1, 2017 and December 15, 2017. The contents of the survey were working place, experience, gender, awareness about a reflection report, etc. The response rates of “The reflection report was useful as a whole” were 52% and 67% in hospital and pharmacy pharmacists, respectively. The other results were as follows: “It was useful for sharing about the contents of training between facilities”, 60% and 100%; “It was useful for sharing about evaluations of students between facilities”, 36% and 68%; “It was useful for students to learn the representative diseases widely between facilities”, 48% and 100%; “It was useful to complement the contents of training between facilities”, 44% and 83%; “It was useful for pharmacists to confirm mature students after both trainings”, 32% and 67%, respectively. In conclusion, both hospital and pharmacy pharmacists were aware of the usefulness of the reflection report, particularly for information sharing about the contents of training between facilities. Unlike pharmacy pharmacists, hospital pharmacists are not necessarily aware of its usefulness for evaluations of students, learning of the representative diseases, complementary training, and confirmation of mature students.

Key words —— model core curriculum, pharmacy education, pharmaceutical practical training, information sharing, pharmacist awareness, questionnaire survey

緒 言

2013年に改訂された「薬学教育モデル・コアカリキュラム」(改訂モデル・コアカリキュラム)(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2015/02/12/1355030_02.pdf, 2017年12月26日)に準拠した薬学実務実習は, 2019年2月から開始される予定である。2015年に公表された「薬学実務実習に関するガイドライン」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/058/gaiyou/_icsFiles/afiedfile/2015/03/03/1355408_01_2.pdf, 2017年12月26日)では, 改訂モデル・コアカリキュラムにおいて大学が主導的な役割を果たし, 実習を行う病院および薬局施設と円滑に連携して実習が実現されるよう, 実習の水準の確保・向上のための様々な工夫等が記載されている。そのなかで, 薬学実務実習の在りかた・目標として, 1)「薬剤師として求められる基本的な資質」の習得, 2)公平で幅広く参加・体験できる実習, 3)大学, 病院, 薬局の連携が挙げられている。3)では, 病院および薬局は, 実習施設間で実習生の実習した内容やその評価等を共有することで, 重複する目標の指導を分担し, 改訂モデル・コアカリキュラムに記載の「代表的な疾患」(がん, 高血圧症, 糖尿病, 心疾患, 脳血管障害, 精神神経疾患, 免疫・アレルギー疾患, 感染症)の体験等を連携して実施し, 実習生に効果的で効率的な実習を行うことが明記されている。

一方, 薬学教育協議会の「薬学実務実習を支援するWEBシステム」(<http://yaku-kyou.org/wp/wp-content/uploads/2017/07/128f619b0f6a90d0405ce1c66e185785.pdf>, 2017年12月26日)によると, 改訂モデル・コアカリキュラムにおいて実務実習を支援するWebシステムでは, 学生および指導薬剤師が1週間ごとおよび実習全体のレポート(振り返りレポート)をWeb上で記入することができること, 振り返りレポートを次施設の指導薬剤師も閲覧することができること, 振り返りレポートを印刷して次施設に渡すことができることの機能の搭載が提案されている。このように, Webシステムでも次実習施設と実習内容の情報を共有し,

大学・施設間の連携を円滑に実施することができるよう工夫が講じられることが提示されている。

2019年度(2018年度末)から改訂モデル・コアカリキュラムに準拠した実務実習(改訂モデル・コアカリキュラム実務実習)が開始される。それに先駆けて, 2018年度から改訂モデル・コアカリキュラム実務実習のトライアルが全国的に実施される予定である。改訂モデル・コアカリキュラム実務実習を円滑に開始するためには早急に大学・施設間の実習内容の情報共有に関する知見を集積することは重要である。

本研究では, 大学・施設間の情報共有に焦点を当て改訂モデル・コアカリキュラム実務実習に向けたトライアルを実施し, 振り返りレポートや「代表的な疾患」に関する事項も含め, 大学・施設間での実習内容の情報共有に関する薬剤師の意識および意見を明らかにするため, アンケート調査を行った。

方 法

1. 大学・施設間の情報共有に関するトライアルの内容

2016年度第Ⅰ期, 第Ⅱ期, 第Ⅲ期, 2017年度第Ⅰ期, 第Ⅱ期において, 岐阜市民病院と岐阜薬科大学附属薬局の両方で実務実習を行った岐阜薬科大学の学生7人のうち, 本トライアルへの参加に対し文書による説明と口頭による同意を得た学生(7人全員, 自由意思による)を対象とし, 以下の内容の大学・施設間の情報共有を行った。各施設の実務実習において, 学生は1週間ごとおよび実習最終日に振り返りレポートを記入し, 各施設の指導薬剤師に提出した。先に実務実習を行った施設の指導薬剤師は振り返りレポートにコメントを記載し, 大学に提出し, 大学は次施設に提出した。また, 後に実務実習を行った施設の指導薬剤師も同様に振り返りレポートにコメントを記載し, 病院と薬局のすべての実務実習が終了した時点で大学に提出し, 大学は前施設に提出した。大学は, 各施設から受け取った振り返りレポートの内容を確認し, 患者情報や学生の個人情報に記載されていないことを確かめた後, 次施設あるいは

振り返りレポート(週目)		氏名()
この1週間で実習したことおよび考えたことを簡条書きで記入してください。		
実習したこと(項目ごとに 関わった日数等も記載)		
関わった疾患(処方解析・投 薬計画等を実施した疾患等) とその人数	がん()名、高血圧症()名、糖尿病()名、心疾患()名、脳血管障害()名、 精神疾患()名、免疫・アレルギー疾患()名、感染症()名、 その他(疾患: 、 名)、(疾患: 、 名)、(疾患: 、 名)	
服薬指導を実施した疾患とそ の人数	がん()名、高血圧症()名、糖尿病()名、心疾患()名、脳血管障害()名、 精神疾患()名、免疫・アレルギー疾患()名、感染症()名、 その他(疾患: 、 名)、(疾患: 、 名)、(疾患: 、 名)	
理解	理解できたこと	
	理解できなかったこと	
実践	実践できたこと	
	実践できなかったこと	
今週できなかったことに対す る改善策		
施設(指導薬剤師を含む)あ るいは大学(担当教員を含 む)に伝えたいこと		
指導薬剤師のコメント		

図1 振り返りレポート

前施設に提出した。また、大学は、事前に学生に
対し振り返りレポートの書き方を説明し、指導薬
剤師に渡すよう指導した。なお、現行の実務実習
モデル・コアカリキュラムに則った実務実習に加
えて、本トライアルを行った。

使用した振り返りレポート(図1)は、薬学教
育協議会が提案する「薬学実務実習を支援する
WEBシステム」に基づき、実習したこと、かかわ
った疾患とその人数、服薬指導を実施した疾患とそ
の人数、理解できたこと、理解できなかったこと、
実践できたこと、実践できなかったこと、施設あ
るいは大学に伝えたいこと、および指導薬剤師の
コメントとした。

2. 調査対象および調査方法

岐阜市民病院の薬剤師29人と岐阜薬科大学附
属薬局の薬剤師6人を対象に、2017年度第Ⅱ期
の実務実習の終了後の2017年12月1日～2017
年12月15日にアンケート調査を実施した。

3. アンケートの内容

使用したアンケート用紙を図2に示す。アン
ケートの内容は、職種、薬剤師の経験年数、性別、
振り返りレポートに対する考え、振り返りレポ
ートについての意見、および実習施設(病院と薬局)
間の連携についての意見とした。回答形式は、職
種、薬剤師の経験年数および性別は択一式、振
り返りレポートについての意見は5件法のリッカ
ートスケール(「そう思わない」、「ややそう思わ
ない」、「どちらともいえない」、「ややそう思
う」、および「そう思う」)、「振り返りレポート」につ
いての意見および実習施設(病院と薬局)間の連
携についての意見は自由記述とした。

4. 評価・解析

アンケート結果は、各調査項目に対する回答の
単純集計による評価を行った。なお、アンケート
に回答した薬局薬剤師の数が少なかったため、統
計解析は行わなかった。

病院と薬局における実務実習の連携に関するアンケート

改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムによる実習において、Web システム上で実務実習生と病院および薬局の指導薬剤師それぞれが「振り返りレポート」を記入することになり、病院と薬局間で「振り返りレポート」の情報の共有が行われます。本アンケートは、「振り返りレポート」および病院と薬局における実務実習の連携についての意識を把握する目的で実施します。本アンケート用紙は厳重に保管し貴重な資料として使わせていただきます。また、本アンケート結果は学会や学会誌にて公表されることがあります。なお、本アンケートの回答は任意によるもので、回答しない場合でも不利益を被ることは一切ありません。

調査にご協力いただける方は、下記の質問にお答えいただきご提出をお願いいたします。

① 職種をお答えください。(ひとつ選びチェック☑)

☐ 病院薬剤師 ☐ 薬局薬剤師

② 薬剤師の経験年数をお答えください。(ひとつ選びチェック☑)

☐ 1 年未満 ☐ 1 年以上 5 年未満 ☐ 5 年以上 10 年未満 ☐ 10 年以上

③ 性別をお答えください。(ひとつ選びチェック☑)

☐ 男性 ☐ 女性

④ 「振り返りレポート」についてあなたの考えをお答えください。(1～5のいずれかに○)

項目	そう 思わない	やや そう思わ ない	どちらとも いえない	やや そう思う	そう思う
実習施設間で実習生の実習した内容を共有するのに役に立った。	1	2	3	4	5
実習施設間で実習生の評価を共有するのに役に立った。	1	2	3	4	5
実習施設間で「代表的な疾患」を広く学んでもらうのに役に立った。	1	2	3	4	5
実習施設間で互いの実習を補完するのに役に立った。	1	2	3	4	5
病院と薬局の全ての実習が終了した時点で実習生の成長を把握するのに役に立った。	1	2	3	4	5
全体として「振り返りレポート」は役に立った。	1	2	3	4	5

⑤ 「振り返りレポート」についてご意見があればご記入ください。

⑥ 改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムによる実習における実習施設（病院と薬局）間の連携についてご意見があればご記入ください。

以上でアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。

実施機関：岐阜薬科大学
問い合わせ先：病院薬学研究室 寺町ひとみ
TEL：058-230-8100、E-mail：teramachih@gifu-pu.ac.jp

図 2 アンケート用紙

5. 倫理的配慮

本研究は、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守し、岐阜薬科大学（承認番号：29-16）の倫理委員会の承認を得て実施した。

結 果

本トライアルにおいて、薬局実習が先で病院実習が後であった学生は 4 人、病院実習が先で薬局実習が後であった学生は 3 人であった（表 1）。

表1 振り返りレポートにおける服薬指導を実施した疾患

A. 薬局実習が先, 病院実習が後の学生

	学生 1 (薬局第Ⅰ期, 病院第Ⅱ期)			学生 2 (薬局第Ⅱ期, 病院第Ⅲ期)			学生 3 (薬局第Ⅱ期, 病院第Ⅲ期)			学生 4 (病院第Ⅰ期, 薬局第Ⅱ期)		
	病院実習	薬局実習	両実習	病院	薬局	合計	病院	薬局	合計	病院	薬局	合計
がん	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○
高血圧症	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
糖尿病	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
心疾患	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○
脳血管障害	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○
精神疾患	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×
免疫・アレルギー疾患	×	○	○	×	○	○	×	○	○	×	○	○
感染症	×	○	○	○	×	○	×	○	○	×	×	×

B. 病院実習が先, 薬局実習が後の学生

	学生 5 (病院第Ⅱ期, 薬局第Ⅲ期)			学生 6 (病院第Ⅱ期, 薬局第Ⅲ期)			学生 7 (病院第Ⅱ期, 薬局第Ⅲ期)		
	病院	薬局	合計	病院	薬局	合計	病院	薬局	合計
がん	○	○	○	○	○	○	○	×	○
高血圧症	×	○	○	○	○	○	×	○	○
糖尿病	×	×	×	×	○	○	×	○	○
心疾患	×	○	○	○	○	○	○	○	○
脳血管障害	×	×	×	○	×	○	×	×	×
精神疾患	○	○	○	×	×	×	×	×	×
免疫・アレルギー疾患	○	○	○	×	×	×	○	○	○
感染症	×	×	×	×	×	×	×	×	×

○は実施, ×は未実施.

表2 薬剤師の経験年数および性別の結果

項目	病院薬剤師 (n = 25)	薬局薬剤師 (n = 6)
薬剤師の経験年数		
1 年未満	2 (8%)	0 (0%)
1 年以上 5 年未満	3 (12%)	2 (33%)
5 年以上 10 年未満	4 (16%)	2 (33%)
10 年以上	16 (64%)	2 (33%)
性別		
男性	17 (68%)	4 (67%)
女性	8 (32%)	2 (33%)

本トライアルにおける振り返りレポートの「代表的な疾患」の学修結果として, かかわった疾患については病院および薬局で 8 疾患はすべて網羅されていたが, 服薬指導を実施した疾患については病院および薬局で脳血管障害, 精神疾患, 免疫・アレルギー疾患, 感染症の疾患を網羅することはできなかった (表 1).

アンケートの回収率は 89% (31/35), 岐阜市民病院で 86% (25/29), 岐阜薬科大学附属薬局で 100% (6/6), 有効回答数はともに 100%であった. 全体として, 職種は病院薬剤師が 81%, 薬局薬剤師が 19%であった.

病院薬剤師および薬局薬剤師における薬剤師の経験年数および性別の結果を表 2 に示す. 薬剤

師の経験年数は 10 年以上が病院薬剤師で 64%, 薬局薬剤師で 33%であった. 性別は男性が病院薬剤師で 68%, 薬局薬剤師で 67%であった.

病院薬剤師および薬局薬剤師における振り返りレポートに対する考えの結果を図 3 に示す. 「実習施設間で実習生の実習した内容を共有するのに役に立った。」で「そう思う」および「ややそう思う」と回答した割合は, 病院薬剤師で 60%, 薬局薬剤師で 100%であった. 「実習施設間で実習生の評価を共有するのに役に立った。」では病院薬剤師および薬局薬剤師でそれぞれ 36%および 67%であった. 「実習施設間で代表的な疾患を広く学んでもらうのに役に立った。」では各 48%および 100%, 「実習施設間で互いの実習を補完

図3 病院薬剤師および薬局薬剤師における振り返りレポートに対する考えの結果

■「そう思う」、■「ややそう思う」、■「どちらともいえない」、□「ややそう思わない」、□「そう思わない」

表3 振り返りレポートについての意見および実習施設（病院と薬局）間の連携についての意見

	病院薬剤師	薬局薬剤師
振り返りレポートについての意見	<ul style="list-style-type: none"> ・評価に用いると前条件で評価が変化するため、評価に対して使用するのは適切ではない。 ・手書きレポート（毎日）、PC 報告に週間ごとのレポートを追加するよりは、何か1つを充実させたほうが良い。週間レポートで情報共有するより総括レポートで共有するほうが成果がわかると思う。 ・今まで何をしてきたかを把握するにはいいと感じた。 ・互いの実習を補完するまでの情報は得られないと感じました。 ・履修した疾患が一目でわかる1号紙などがあったほうが良い。手書きより入力した文章のほうが良い。 ・振り返りレポートに具体的に詳しく記載されていると実習内容や理解といった情報が得られると思う。 ・これまで実習生本人に聞いていたが、このようなレポートがあると確実に把握できる。 ・週単位で進捗が把握できるのはいいと思います。ただ、これまでのレポート、システムに加えての運用か、入れ替えなのかによって負担が違ってくると思います。学生も指導薬剤師にも負担増とならない工夫をお願いします。 ・指導薬剤師が今以上やるが増え、大変。更に業務が増えるため何も得になることがない。今でも評価をPC入力するのと書くのが両方ある意味もわからないため。 ・臨機応変に対応していくうえで大切だと思う。あったほうが良いと思う。 ・薬局で行ってきた実習内容の把握をすることは必要と考えるが、指導薬剤師のコメントを見せると、指導前から実習生を評価してしまうことがある。先入観が生じないような形式がいいのではないかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・理解できなかったことに関する自由記述が次の指導に活かして有用だと思った。 ・理解できなかったこと、実践できなかったことの欄を見て、次の指導に活かすことができたので良かった。 ・学生の進捗状況を把握するのに役立った。 ・前の実習での学習内容がわかることが良かった。 ・本振り返りレポートはかかった疾患、服薬指導を実施した疾患について詳細に記載できるが、実技に関する項目が少ないと思われる。 ・施設に伝えたいことに建設的なコメントをする学生がいて実習内容や対応方法を再考するきっかけとなりました。
実習施設（病院と薬局）間の連携についての意見	<ul style="list-style-type: none"> ・服薬指導した領域はその日のデータでなく累積であると思う。 ・難しいと思いますが、ネット上で情報を共有できると便利だと思いました。 ・履修状況が一覧でわかる物がほしい。 ・振り返りレポートを1つずつ確認しなくても全体像が把握できるようにしてもらいたいです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・薬局で十分には学習できなかった領域を病院で補うために有用なことだと思う。 ・実習前に振り返りレポートを見ることにより、より丁寧に指導すべき点を認識しつつ指導することができた。 ・Web 上で情報共有できるようなシステムがあれば便利ではないかと考えます。 ・8疾患の振り分けなどこれまで以上に密に連絡をとる必要があると感じました。 ・実習施設ごとにかかわることのできる疾患の情報が蓄積できるようになると思われるので実習先の病院と薬局のマッチングが可能、期待できる。 ・薬局での実習内容がわかると病院での実習の参考になるのでレポートは有意義だと思います。今後はオンラインでやりとりができるとよいと思います。

するのに役に立った。」では各 44% および 83%, 「病院と薬局のすべての実習が終了した時点で実習生の成長を把握するのに役に立った。」では各 32% および 67%, 「全体として振り返りレポートは役に立った。」では各 52% および 67% であった。

病院薬剤師および薬局薬剤師における振り返りレポートについての意見および実習施設（病院と薬局）間の連携についての意見の結果を表 3 に示す。振り返りレポートについての意見では、前の施設での実習内容を把握することができ、指導に活かせるとの意見が多く見られたが、否定的な意見やさらなる改善点に関する意見も見られた。実習施設（病院と薬局）間の連携についての意見では、連携および Web 上での情報共有の必要性に関する意見やさらなる改善点に関する意見が見られた。

考 察

本研究では、大学・施設間の情報共有に焦点を当て改訂モデル・コアカリキュラム実務実習に向けたトライアルを実施し、大学・施設間での実習内容の情報共有に関する意識および意見について薬剤師に対するアンケート調査を行った。

本トライアルにおける振り返りレポートの「代表的な疾患」の学修結果として、かかわった疾患については病院および薬局で 8 疾患はすべて網羅されていたことから、学生は病院および薬局実習を通してこれらの疾患を持つ患者の薬物治療にはかかわることができたといえる。一方、服薬指導を実施した疾患については病院および薬局で脳血管障害、精神疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症の疾患を網羅することはできなかった。服薬指導においてすべての疾患を網羅することができなかった要因として、現行の実務実習モデル・コアカリキュラムに則り服薬指導以外の調剤（注射剤調剤含む）、医薬品情報、院内製剤などのすべての specific behavioral objectives (SBOs) について実習を行う必要があったため、服薬指導に関する SBOs について改訂モデル・コアカリキュラムで想定している程の実習時間を十分取れなかったことが一因として挙げられる。また、岐阜市民病院

および岐阜薬科大学附属薬局では、ベッドサイドや窓口で学生ができるだけ同じ患者に継続して経時的な患者モニタリングや服薬指導にかかわることを優先していたため、実際に服薬指導した患者の疾患に偏りがあったことも一因として挙げられる。一方、かかわった疾患については、実際に服薬指導を行わない患者においても調剤（注射剤調剤含む）や薬剤管理指導に関する SBOs の実習の際に処方解析・投薬計画等の実施を行っていたため、すべて網羅することができたと考えられる。改訂モデル・コアカリキュラムの「F 薬学臨床」において、「これら疾患（代表的な疾患）を持つ患者の薬物治療に継続的に広く関わること」と明記されている。また、改訂モデル・コアカリキュラムの「薬学教育モデル・コアカリキュラムの基本理念と利用上の留意点について」における「1. モデル・コアカリキュラムの基本理念と位置付け」には、「具体的な授業科目等の設定や教育手法等は各大学の裁量に委ねられている」と記載されている。さらに、改訂モデル・コアカリキュラムの「平成 25 年度改訂版・薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂概要」における「F 薬学臨床」には、『薬学臨床において幅広く薬物療法を学修するよう、学修すべき「代表的な疾患」を冒頭に提示し、実習施設で「代表的な疾患」を持つ患者に広くかわりそれらの薬物療法を実際に体験することを促している。また、大学・実習施設での学習方略の自由度を確保するため、目標は幅広い解釈が可能な表現を多く含んでいるが、最低限共通して確保したい学習内容について括弧内に例示している。』と記載されている。このように、大学や実習施設での学習内容に対してはある程度の自由度が確保されているが、学生が卒業時には、少なくとも代表的な疾患を持つ患者に対し、医薬品の適正使用や副作用のモニタリング等を通じて患者の有効かつ安全な薬物治療に貢献することができる能力（資質）を有していることは必須である。幅広い疾患に対する処方解析・投薬計画等の実施および服薬指導の実施はともに、薬剤師として患者の有効かつ安全な薬物治療に貢献することができる能力（資質）の醸成に大きく寄与すると考えられる。本トライアルでは、8 疾患すべての

処方解析・投薬計画等を実施することができた一方で、8疾患すべてを網羅することはできなかったが一定の疾患に対し服薬指導を実施することができたことから、学生の能力の醸成は十分に行うことができたと考えられる。もし、薬局と病院で、代表的な疾患について処方解析・投薬計画等や服薬指導をほとんど実施することができない状況が生じるのであれば、何らかの対策が必要である。具体的には、今後改訂モデル・コアカリキュラムで予定されている薬局実習が先で病院実習が後の場合、病院実習の後半で処方解析・投薬計画等や服薬指導を実施していない疾患を有する患者を指導薬剤師が病院のなかで抽出し、学生に処方解析・投薬計画等や服薬指導の実習ができるよう調整することが考えられる。また、学生の意見として、振り返りレポートの記入により服薬指導を行っていない疾患を学生自身が把握することができ、服薬指導を行いたい疾患を指導薬剤師に希望することができたとあったことから、振り返りレポートは学生が幅広い疾患にかかわることができるよう指導薬剤師が調整するための重要な資料であるといえる。

一方、アンケート結果として、振り返りレポートに対する考えでは、病院薬剤師、薬局薬剤師ともに、過半数が「実習施設間で実習生の実習した内容を共有するのに役に立った。」と回答したことから、薬剤師は実習生の実習した内容の共有に振り返りレポートが役に立ったと考えていることがわかった。一方、「実習施設間で実習生の評価を共有するのに役に立った.」、「実習施設間で代表的な疾患を広く学んでもらうのに役に立った.」、「実習施設間で互いの実習を補完するのに役に立った.」、および「病院と薬局のすべての実習が終了した時点で実習生の成長を把握するのに役に立った.」では、薬局薬剤師では過半数を占めていたが、病院薬剤師では過半数に満たなかった。このことから、薬局薬剤師とは異なり、病院薬剤師は、実習生の評価の共有、「代表的な疾患」の学修、互いの実習の補完、すべての実習終了後における実習生の成長の把握には必ずしも役に立ったと考えていないことがわかった。また、病院薬剤師、薬局薬剤師ともに、過半数が「全体として振り返り

レポートは役に立った.」と回答したことから、薬剤師は全体的には振り返りレポートは役に立ったと考えていることがわかった。すべての項目において、薬局薬剤師よりも病院薬剤師は、振り返りレポートが役に立ったと考えていない傾向が見られたことも特徴的であった。振り返りレポートに対する病院薬剤師と薬局薬剤師の意見の違いの要因として、病院では複数の薬剤師が担当業務ごとに協力して学生の指導を行うため実質的には11週間全体を通して指導していないのに対し、薬局では1人あるいは少人数の薬剤師が11週間全体を通して指導を行っていることが考えられる。

振り返りレポートについての意見では、前の施設での実習内容を把握することができ、指導に活かせるとの意見が多かった一方、互いの実習を補完するまでの情報が得られない、薬剤師の業務が増える、実習前に指導薬剤師のコメントを見ると学生の評価に影響するとの否定的な意見が見られた。記入方法や評価での位置づけ等において振り返りレポートの運用の仕方を十分検討する必要があることがわかった。病院および薬局で振り返りレポートによる情報共有を行う際には、指導薬剤師が患者等の個人情報に記載されていないことを確認する必要があるが、学生の守秘義務は大学が責任をもつことから、¹⁾ 大学教員は患者等の個人情報が施設間で漏えいしないよう振り返りレポートに個人情報が記載されていないことを確認するのは当然である。できれば、大学教員は次施設の指導薬剤師が学生の評価に影響を及ぼす記載（例えば、学生の個人情報、学生の病気に関すること、学生に対する厳しい批判）がないかを確認することも必要であると考ええる。

実習施設（病院と薬局）間の連携についての意見では、連携およびWeb上での情報共有の必要性に関する意見やさらなる改善点に関する意見が見られた。今回はWeb上での情報共有を行わなかったが、改訂モデル・コアカリキュラム実務実習ではWeb上での振り返りレポート等の情報共有が行われることが提案されている（「薬学実務実習を支援するWEBシステム」）。振り返りレポートのWeb上の入力には利便性の点から実現が望まれる。また、「代表的な疾患」や実技内容などの

情報については、大学が橋渡し役となり、病院と薬局で互いに密な連携を取ることが課題である。

本研究の限界として、現行のモデル・コアカリキュラムに準拠した実務実習のなかで本トライアルを実施しているため改訂モデル・コアカリキュラム実務実習とは異なること、対象が大学、病院および薬局それぞれ1施設で互いに関連がある施設であること、薬局薬剤師のアンケート回答者数が少ないこと等が挙げられる。しかしながら、いち早く改訂モデル・コアカリキュラムに向けた大学・施設間での実習内容の情報共有に関する実務実習のトライアルを実施し、その評価を行った意義は非常に大きいと考える。2018年度から改訂モデル・コアカリキュラム実務実習のトライアルが全国的に実施される予定であり、本研究で得られた知見はそのトライアルにおいて大学・施設間での実習内容の情報共有を行う際の重要かつ数少ない参考情報となる。各施設における実習内容の情報は取り扱いに慎重を期するものも含まれる可能性があることから、改訂モデル・コアカリキュラム実務実習を行うにあたり各大学や各施設の実情にあった形で最適な実習内容の情報共有を行うことができるよう2018年度からのトライアルの実施によりさらなる知見を集積していく必要がある。

本研究では、大学・施設間での実習内容の情報共有に焦点を当て改訂モデル・コアカリキュラム実務実習に向けたトライアルを実施し、大学・施設間の情報共有に関する薬剤師の意識および意見

を明らかにすることができた。改訂モデル・コアカリキュラム実務実習を円滑に開始するために、早急に振り返りレポートの運用や連携体制など本研究で得られた知見を含め情報を整理し、大学・施設間の実習内容の情報共有の在りかたを考えていくことは喫緊の課題である。2019年度からの実務実習では、大学、病院および薬局が着実に、密に、かつ適切に実務実習の内容の情報共有を行い、互いに連携することにより、学生にとって連続性のある実習を行うことが重要である。

謝 辞

アンケート調査にご協力いただいた岐阜市民病院薬剤部および岐阜薬科大学附属薬局の薬剤師の皆様へ深く御礼申し上げます。

利益相反

開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 北原隆志, 樋口則英, 一川暢宏, 神山朝光, 深堀京子, 岩松洋之, 相川康博, 佐々木均, 薬学6年制における実務実習教育の内容と実施体制に関する大学側・受入施設側の実態調査, 医療薬学, 2007, **33**, 619-626.